

するかかわり感情には、(a) 内在的かかわりをする場合
—きちつと一致した（すれずにある）感じがする、(b)
内接的かかわりでは—軌道に即した動きや変化を感じ
られる、(c) 接在的かかわりでは—軌道を修正すること
ができるよう感じられる、(d) 外接的かかわり方では
—軌道をなぞったり、見通しを立てたりできるよう

感じられる、(e) 外在的かかわりでは—軌道からはずれていると感じる、(f) 随所自在的かかわりでは—どの点にもかかわって動き出せる感じがする、(g) 状況偏在的かかわりでは—どこにでも軌道をつくつて振舞える感じがする、などが挙げられる。

一人ひとりのイメージの世界を表現する
モノとしてのおもちゃ

今井和子



へはじめに

大人から見ると「遊具」も「玩具」も「教具」も少しづつ違う意味でいとらえられていますが子どもにとっては、新聞紙も、洗濯ばさみもミニカーもぬいぐるみも、みんな興味のあるモノが「おもちゃ」なので

はないかと思ひます。大人の定義とは無関係に、子どもたちの求めるモノを私は、「おもちゃ」と広義にとって考えて考えることにして います。

が、私は、「おもちゃ」は子どもたちが自分の生活の必要性の中からつかみ取つていくもの・自分の求めに従つて行動しているとき出会いのモノだと思つています。そうした出会いが生まれるような環境を拓いていくことが大人の役割なのかもしません。

私が、子どもとモノの感動的な出会いを通して学んだ「おもちゃとは?」について早速述べてみたいと思います。

△自己発揮の対象物であること△

今、私が一番面白いなと思って見ているのは、自分の好きな所に行ける自由を獲得しはじめた一、二歳児の、探索を通してのモノとの出会いの姿です。それは、子どもとモノとのかかわりのありようを根本的に考えさせられる重要な意味を含んでいると思えるのです。

五月、竹やぶを散歩していたら、地面から十センチぐらい芽を出した細筍をみつけたさなえ(二歳)が、

「あ?」と歎声をあげ、さっそくそれを引き抜こうとしました。けれどもなかなか抜けるものではありません。そばにいた私の手を引っぱって「とつて」と求めるので私も力いっぱいやってみたのですがどうしても抜けません。そこで「さなちゃん、とれないよ」と話すと彼女はにぎりこぶしをつくつておこり、何とか取つてほしいと全身で訴えるのです。そこで先の尖った石を使って切りおとしますと、さなえは大喜びでその筍をもち、先っぽの繊維がしづぼしづぼと生えたところをペロッとなめて石段の所にぬりつけるのです。そして何も描けないとわかるとまたなめてこすりつけるので、つい「さなちゃん。なめてはきたない」と注意すると、ニコッと笑つて水たまりを見つけ、そこに筍の毛をつけた石段にしきりに何か描き始めました。竹やぶの細い筍をみた瞬間、彼女はそれを筆みたいなものだと想いついたのでしょうか。細筍をみてとつさに、彼女の祖父が筆を使つている姿を想い浮かべたのかかもしれません。ともかく自分の発想を行動に表わさ

ずにはおかなかつたさなえです。

△幼児の生活要求にこたえるモノであること▽

幼い子どもの活動には、周囲のモノを探りながらその事物を知り、そのものらしく扱えるようになつていぐ力と、もうひとつ自分が出会つたものをいろいろにみたててあそぶ力の両方が養われていくようです。幼児がモノに出会つてそれを何かにみたてている時、大人がそのみたてやイメージを誤解すると子どもはとてもおこります。それほど幼児にとって自分のつもりやイメージでの世界は大切なものです。

さなえが、細筈を見た瞬間、自分の発想したこと表現せずにいられなかつたこと。いわばモノは、(おもちゃも同様ですが) そうした子どもの自己発揮の道具というのでしょうか。まず内的な自分を表現する個性的な、その子独自のモノでなければならないと考えさせられたわけです。そしてモノは、子どもたちに扱われることによって、はじめておもちゃになるという

極めてあたりまえのことが、私の中で確認されました。というのは、ここ数年来、おもちゃが単にコレクション的に集められたり、飾られるのみで、あそぶための自己発揮の道具になつていない傾向があるからです。ミニカー、シール、テレビのアニメ人形など次々並べ抱え込むだけで、そこにはその子独自の発想を表現する活動がないのです。おもちゃは、まず子どもたちの育ちはじめた多様なイメージネーションも表現しうる、生活要求にこたえるモノであつてほしいというのが、私の基本的な考え方です。そういう点で、探索活動の旺盛な一、二歳児がなぜ、石や棒つ切れ、布、新聞紙のような素材的なものを好むか? 答えは明らかです。

△選択肢をもつた半素材的なおもちゃを▽

子どものあそびの発達は、子どものイメージする方に則しているのではないかと考えられます。前述のさなえのように、あるモノを別のものにみたてたり、状



▲ステージごっこ

況を想定したりする力が発達してくると、子どもたちは、遊び方や使い方のはつきりしたおもちゃだけでは物足りなくなり、自分たちのイメージにあわせてモノを扱ったり、多用な使い方ができるモノを好んで使用するようになります。すなわち、子どもたちは、モノの素材や特徴を利用して自分流に変えて活用する力が育つていきます。例えば段ボール箱をのりものにしたり家に組み変えてあそぶ姿です。すなわち自分たちの目的にむかって段々モノをイメージにあわせつくり出していくわけです。従って、子どもにとつてよ

▼基地ごっこ



いおもちゃとは、確かに子どものイメージや創造性を育くみ、遊びを発展させるモノなのだと思います。

そういう点で私は、子どもたちのイメージネーションが育ち始める早い時期から、半素材的ないろいろなものをおもちゃの一部として提示してきました。

砂袋、大小様々な段ボール箱、布、牛乳パックを五箇十箇ぐらいつなげたもの、バトンのような棒、ラワン板でつくった木製の木わく（写真参照）などです。

△半素材的なモノで、あそぶ子どもの姿△
砂袋は、さらしのよるな丈夫な布で袋中に一キログラム、三キログラムぐらいが出ないよう上からもう一枚布袋をかぶす。それをたくさんつくつておくと、年のあそび方はさまざまですが、例えば工

砂を入れ、砂
ふせたもので
齡によつてそ
事現場で働く



▲バスごっこ

おじいさんたちの様子をみてくると、それはたまに工事現場の重たい砂袋になり、三、四人で力をあわせます。そして比較的小さな砂袋は、肩にかけて運搬されます。そしてお米やさんごとに利用されたり、宅配便やさんの荷物になつたりします。

中が空洞になつて いる単なる木わくが、子どもたちの豊かなイメージーションを実現する遊具として、いかに活用されてきたかは、写真で納得していただけるのではないかと思 います。

子どものたちの日常の生活経験から内在化されたイメージが、さまざまなものと出会い、豊かな表現に結びついていく。そのプロセスこそあそびであることを語ってくれるようなおもちゃが、子どもと大人の共同生活で豊かにつくられていふことを願つてやみません。

川崎市宮崎保育園